

サーベイで何をすべきか、ざっとこんなところだろう。

ここ数年のトレンドは可視光帯以外での AGN サーベイである。赤外線・サブミリ波のサーベイは赤外線宇宙天文台（ISO：ESA が 1995 年に打ち上げ、1998 年まで活躍）や JCMT 電波天文台のサブミリ波受信機 SCUBA の稼動で一気に進み、ダストに隠された AGN の存在が大きくクローズアップされた。

また、X 線での観測も ASCA 及び ROSAT 以来、BeppoSAX, Chandra, XMM-Newton による観測で新しい局面を迎えた。狭線 1 型セイファート銀河の存在が脚光を浴び、ブラックホールの進化モデルが一つの潮流にまでなった。また、今まで見過ごされていた 2 型クェーサーの発見も相次いだ。

可視光にウエイトがあった昔の AGN サーベイではわからなかったことが一気に総ざらいされた感じもする。そしてそれらの知見は次世代のサーベイに生かされねばならない。次期赤外線天文衛星 ASTRO-F・IRIS, SIRTF, 大規模ミリ波・サブミリ波アレイ ALMA, さらには HST の後継機 NGST. 私たちはこれらの新しい観測装置でどのような AGN 研究を行っていけばよいのか？ 深刻に考えてみる必要がある。その意味で、この時期に行われた“AGN サーベイ”研究会の持つ意味は大きかった。

5. エピローグまであと少し

だいたい多くの国際研究会において、日本人はいつもマイノリティである。今回の研究会では日本人の出席者が 5 人だった。参加者総数が約 100 人だから、やはりマイノリティだろう。でも私たちはとても楽しくアルメニアの中で交流することができたように思う。

特筆すべきは、やはり嘉数さんの大活躍だろう。考えてみれば嘉数さんはまだ MI になってから 3 ヶ月しか経っていない。多分、出席者の中で最年少だったと思う。しかし、彼女の発表したポスター論文は大人気だった。赤外線天文衛星 ISO の遠赤外線サーベイで見つかった天体の性質を調べた最新

の研究成果である。

研究会初日。会場の前のロビーがポスターを貼る会場だった。貼る位置はどれも適当らしい。アバウトなお国柄なのかもしれない。私はすかさず嘉数さんに言った。

「一番目立つあの場所に貼ろう」

「わかりました」

まだみんなが油断していた頃だったので、無事一番目立つところにポスターを貼ることに成功した。

彼女のポスターは実は 3 枚組だった。通常は A0 サイズで 1 枚である。しかし、遠赤外線源のマップやチェックで撮った可視光スペクトルの一覧を示したかったので、豪華な 3 枚組になってしまったのである。3 枚束ねて貼るしかないと思っていたのであるが、デープがウインクする。

「ユーコ、ヨシ、まかせておけ」

よくわからなかったが 3 枚の内、2 枚のマップはデープに手渡すことにした。そうこうするうちに研究会が始まったので、とりあえずポスターの件は一休みとなった。

お昼の休憩に入り、ビュラカン天文台の食堂でアルメニア料理のランチが始まった。食べ終わってコーヒーを飲んでいるとデープがやってきた。

「ユーコ、ヨシ、ポスターは完璧だ。ジョー (Joe Mazzarella) が上手いことやってくれた」

どうもド派手なところに貼ってくれたみたいだ。

会場に戻ると、ポスターボードではなく、会場の壁にきれいに 2 枚のポスターが貼ってあった。これは目立つ。まさに完璧である。

ジョーがいた。

「どう、これ？」

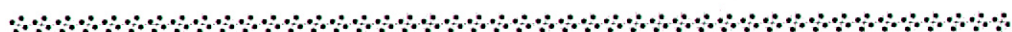
デープ・ジョーの連携プレイに感謝した。嘉数さんのポスターはこれで完璧になった。

この研究会で知り合いになった A さんの発表もポスターだった。

「A さん、ポスターどこ？」

と嘉数さんが聞くと、

「実は、あそこの隅の裏なんです」



隅の裏。これは最悪である。見に行くと、まったく最悪の場所だった。見ようという意志の無い人は絶対にこない。そんな場所だったのである。

嘉数さんが聞く。

「どうしてこんな所に貼ったんですか？」

無邪気な質問であった。

「気がつくと、ここしか残っていなかったんですよ」

「だめですよ。ゆっくり昼飯なんか食べているからですよ」

何と A さんは MI の大学院生に注意されているのである。A さんはそれなりのランクの研究者に見えたのだが、この時から嘉数さんの支配下に入ることになってしまった。

とはいえ、何の問題も起きない。これは嘉数さんのナイス・キャラクターのおかげだと思う。とにかく、明るい、優しさに満ちている。笑顔がさわやかである。指導教官とまったく逆キャラなのである。さらに、眼に力がある（これについては彼女は若干悩んでいる節がある）。英語がペラペラである（日本語もペラペラである）。とにかく言うことなし、なのである。デーブやシルベインにもかわいがられている。研究会ではルイス・ホーや多くの人に声をかけられていた。人徳。それはまさに彼女のためにあるような言葉であった。

私も見習わなくてはいけないだろう。「老いては大学院生に従え」この名言をアルメニアに残しておくことにしよう。

6. エピローグ

「ここは地の果てアルメニア どうせデュバンの夜に咲く……」

チョット古いかなあ、など思いながら口ずさんでみた。

“カスバの女”という歌だったように思う。もちろん元歌では“アルメニア”の部分は“アルジェリア”であり、“デュバン”は“カスバ”である。しかしこんな風に入れ替えて歌ってみても、妙に哀愁が漂う。

これはいける。一人、悦にいていた。

アルメニアが地の果てだとは思わない。ただ、アルメニアは確かに遠かった。しかし、懐かしい香りのする国であった。国境だとか、時代だとか、なんだかとても面倒くさいもののように思えた。

疲れた？ それも事実である。しかし、全ては想い出に溶けた。

「アルメニアか……」

「先生、なんですか？」

「ああ、なんでもないよ」

「でも、なんだか変な歌、口ずさんでいませんか？」

（うーむ、するどい）

そんなことを思いながら、もう一度ひっそりと口ずさんだ。

「ここは地の果てアルメニア どうせデュバンの夜に咲く……」

嘉数さんは？

今度は確かにあさっての方向を向いていた。

もうすぐ成田空港だ。

～完～

Back to the Markarian Galaxies

Yoshiaki TANIGUCHI

Astronomical Institute, Graduate School of Science, Tohoku University, Aoba, Aramaki, Aoba-ku, Sendai, Miyagi 980-8575, Japan

Abstract: I present a tale on my sentimental journey to the Byurakan Observatory in Armenia. This observatory is very famous because Dr. B. E. Markarian made a historical survey for blue galaxies, the so-called Markarian galaxies. As a matter of fact, the first galaxy that I observed is Markarina 297. Therefore, the Byurakan Observatory is one of special observatories for me. Fortunately, I was invited to give a talk in the conference on AGN Surveys (IAU Colloquium No. 184) held at the Byurakan Observatory in June 2001. It is my pleasure to introduce this observatory for Japanese astronomers.

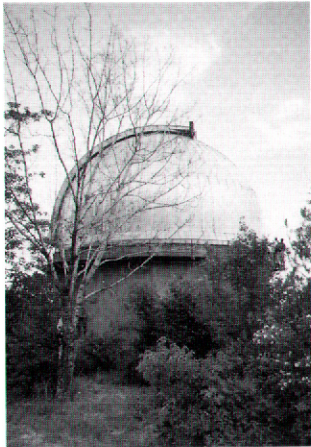
付記 ◆

今年は天文月報の1月号にも私の拙文を載せていただきました：「口径8m級望遠鏡の戦国時代を駆け抜ける」。そして今回の「マルカリアン銀河の故郷を訪ねて」です。これらの記事を読まれて「この人たちはまじめに仕事をやっているのだろうか？」と、疑問をもたれた方もおられるかもしれませんが、心配はご無用です。

私のように年間2ヶ月から3ヶ月の期間、外国出張をしていると、出張先でも研究・教育をすることが必須になります。例えばマウナケアに観測に行くと、観測期間中

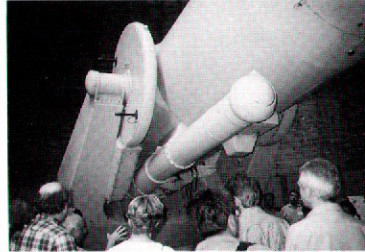
は同行している大学院生と顔をつき合わせている時間が結構あります。下手すると大学にいる時以上に一緒にいる時間が長くなります。したがって、その間に研究テーマについて話し合ったり、論文を書いたり、直したりする時間が結構あるのです。実際にマウナケアから論文を投稿したり、改訂したこともずいぶんありました。

「研究は楽しい」と「研究は厳しい」を大体イコール・ウエイトでこなしているという感じでしょうか？ まだまだ、旅は続きそうなので、たくさんの研究成果が出せるかもしれません。今後とも御指導いただければ幸いです。



▲マルカリアン博士がサーベイに使用したシュミット望遠鏡が入っているドーム。

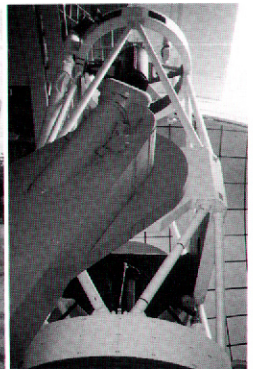
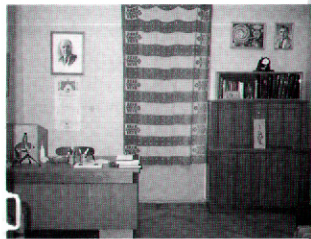
▶ アンバルツミアン博士の書斎。ピュラカン天文台構内にある建物の一つにある。今は博物館のようにになっている。



◀ ▲マルカリアン博士がサーベイに使用したシュミット望遠鏡。有効口径は1m。サーベイは頂角3度の対物プリズムを装着して行われた。前号でサンダース (David B. Sanders) 博士が撮影していたのはこの望遠鏡でした。



▲すっかり意気投合したルイス・ホー (Luis Ho) 博士と嘉数さん。



▲ピュラカン天文台にある最大の口径2.6m望遠鏡(左)とそのドーム(右)。



▲アンバルツミアン博士のお墓。



▲マルカリアン博士のお墓。アンバルツミアン博士のお墓から20mほど離れた場所にある。アララット山の見える素敵な場所である。



◀ エレバン市の街中にあるレストランで。左から筆者、嘉数さん、サンダース (David B. Sanders) 博士、オーセル (Herve Aussel) 博士。



▲嘉数さんのポスターの周りにはたくさんの人だかりができていた。